雜錄

フイドラー「近代自然派と藝術上の眞」

勝部謙造

他の說を批評するのに其說の論旨を徹底して內部から矛盾を指摘するといふ方法を取れば割合にやり易いものであるが其代り評者自身の獨特の見地があらはれて居ないだけに面白味が少い。これに反して自分に何か定見があつてそれからして他の說を批評したのになると其中に筆者其人の說が樣々に織り込まれて居るから場合によつては中々面白い物がある。こゝに今紹介しようと云ふフイドラーの自然主義論（Conrad Fiedler: Moderner Naturalismus und Künstlerische Wahrheit, 1881）の如きは題目も筆者も今更珍らしくもないものであるが然しフイドラー自身の藝術に關する考の如きは決して古いと云ふ事は出來ない。何時までも新らしい味の出る面白い考へ方である。それで今左に其大要を紹介する事とする。

一千八百七十年代の終りにかけて寫實派の巨匠——畫家クルベー及び小說家フロオベルが相繼いで他界した。實際藝術上の近代自然主義の勃興はこの兩者に負ふ所が甚だ多かつたのである。當時科學的精神に基いて實證的傾向が一世を風靡して居たので大勢に乘じて藝術のために新なる天地と、より確實なる基礎を與へようとした自然派の人々の意氣は實に熾なるものがあつた。

彼等自然主義者の主張する所は一言にして言へば藝術に於て我々は自然を其凡ての範圍に於てあらゆる方面から全く裸にしてありのまゝに觀照し而して恐るゝ事なく大膽に其のあるがまゝを叙述せねばならぬといふのである。ところが在來の藝術はそれをやつて居ない。人々は現實を美化する事にのみこれ力めた。從つて彼等の表現したものは現實の眞相ではなくて虛僞の假作である。これはかの擬古派や浪漫派の藝術家が好んでやつた所であつて、美とか理想とかを追求して勞作して行くと同時に、亦彼等はこれ等の美、理想といふやうなものゝ存在を認めると云ふ點に於て、其根底にある種の獨斷を許して居たのである。かくの如きはかのスコラ學派や神學やと共に既に過去の時代に屬すべきものである。新時代の藝術はこういふものではなくて確乎たる實證主義の地盤の上に立つて眞理を追求するものでなければならぬといふ考からしてかのゾラの如きは實驗小說（Le roman expérimental）なる語を用ひて、事實にあらざれば斷じて信ぜざるこの「科學の時代」の文學をば建設しようとした。卽ち實驗と云ふ事を基礎にせる自然科學的方法が無機的自然の研究から漸次有機的自然界に迄進んで用ひられて居るが、こゝで更に一歩を進めてこの方法を人間のGemütとかGeistとか云ふものゝ色々の作用の研究にまで押しひろめて行かうと云ふのである。クルベー等もまことの眞理の忠實なる友を以て自ら許し、而して現實の眞相を表現せんがためには畫家自ら見又捕えたる所を寫し出せば足れり、寫實主義の精髓は理想の否定にありとまで極言して居る。

要するに近代自然主義は古の藝術が想像や夢の世界に屬する理想といふものを追求して居たのに反對して、現實界の確實なる地盤の上に眞理を求めようといふ事を主張するのである。從つて其藝

術論に於て最も新奇な點と云へば、藝術の本質についての論爭を新しい高い立脚地に移したと云ふところにある。

こゝで一つ問題になるのは一體自然主義では眞理眞理と云ふけれども、彼等の主張によると現實をありのまゝに寫すのが藝術の本旨である。それ故に彼等の表現するのは Wahrheit ではなくして Wirklichkeit ではないかといふ論が起る。これに對して自然主義者は答へて、いかにも其通りであるが、現實を措いて其他には決して眞理といふものはない。現實卽眞理であると云ふて居る。

かく自然主義は在來の藝術論に見る樣な理想とか云ふ窮屈な獨斷の羈絆を脫し、只現實のありのまゝを無限の變つた方法で寫し出して自由な天地に彷徨して其天分を發揮するものである。

自然派の主張はこの樣に頗る簡潔明晰であつて一見何等の矛盾とふくまない樣である。然し實際はこの昔の理想から解放されて、新に得たと思はれる自由をば更に發揮して見ると意外な矛盾が彼等の主張の中に包藏されて居るのを見出すのである。

近代自然主義者は所謂現實といふものについては頗る素朴的な考を有つて居て現實の本來何物であるかといふやうな事については全く問ふ所がない。こういふ問題其ものが既に蛇足であるといふ風に考へて居る。それで此素朴な考へ方の內には、藝術家と現實、個人と世界との對立を明に許して居る。藝術家が現實を觀察し表現するといふのであるから、他のこういふやうな考へ方と同樣に矢張り此兩者を二元的に見て居るのは明らかである。所が自然主義者はかく現實をありのまゝに忠實に寫すと云ふからには、これにたづさはる藝術家の藝術的活動は決して奔放自在なものたるを得ない。なぜかと云ふに其藝術的活動は自分とは別

な現實界の事物をば一毫一厘も違はぬやうに忠實に寫し出さねばならぬから、その點に於て絶えず現實界の事物の拘束をうけねばならぬからである。卽ち藝術家の人格は現實界の奴隷となり何等創作的自由を有せないといふ事になる。これは實に自然主義としては非常な痛い急所である。この一點からして他は凡て推して知るしべである。

先づ第一に藝術家が寫し出さうとする材料を選ぶのに當つて、凡て實在せるものは皆同じ度合に眞理を含むものであるからして何を特に選ばねばならぬと云ふ事はない樣になる。正直に寫しさへすれば何でもかまわぬのである。次に其寫し方についても正直にあらはし、表現の仕方が行屆いて居るか否かといふ事のみに心を奪はれ他をばあまり顧みない樣になる。結局自然主義の追求して居る目標は之を藝術家の方面から云ふと藝術家の個性の自然化と云ふ事であつて、又製作の方面から云ふと表現しようといふ世界の目錄を作つて居る樣なものである。

この樣な困難は果してどこから生じて來るのであらうか。實は獨り自然主義のみでなく凡て在來の藝術論が其根底に藝術家と現實との二元的對立を許して居るからである。藝術的活動の本質と云ふ問題について昔から色々立てられた見解は皆此假定に基いて居る。勿論かくして出來た考は千差萬別ではあるが大體に於て二つの大きな反對の見地に分ける事が出來る。一は「現實の改造」(die Umgestaltung der Wirklichkeit)で、他は「現實の模寫」(nachahmenden Darstellung der Wirklichkeit)である。そうするとつまり此二者孰れにしても、ある外的な目的があつて、藝術は此目的の實現せられる手段に外ならぬと云ふ事になる、自然派の人々が其意氣の熾なりしに似ず、此藝術家と現實との對立と云ふ根本的假定をば空しく許容し

て居る。畢竟彼等の說も矢張り古い問題の新しい變形に過ぎないのである。

一體自然派の人達は現實の模寫といふ事をやかましく云ふて居るが、彼等は果して此方法によつて眞に現實の眞相を捕えて居るか否か。又果して捕え得るものであるか否か。現實はいかにも人間の意志や行爲には制限を與へるものであるけれども、我々の凝視（Betrachtung）には、永久に變化流動して居るものであるのを、自然派の人々は不變の、凝結した形式にはめて考へて居る。研究者の眼や、解剖者の手に這入つて來る生は云はゞ死んだ生である。そうして見ると自然派の人々の表現しようと云ふ現實は現實ではなくて、現實の假面、幽靈である。

かの、藝術家は眞理といふやうな事は顧みないで、これを超越して我々の普通の意識に、まことなる、實在せるものと思はれる事を冷靜に觀察し記述するものであるといふ考は非常に間違つて居る。科學ですら今日では與へられた眞理を發見するものでなくて眞理を創造するものであると言はれるではないか。まして藝術がどうして只「所與」を表現するだけのものであると云はれよう。

所謂認識といふ事は全然思索家の問題であつて、藝術家の任務はこれと全く別な方面に求めねばならぬと云ふ考は許すことの出來ぬものである。「眞理とは何ぞや」の問題は獨り哲學的認識のみの問題でなく藝術的表現の世界にも亦存するものである。哲學者が思惟によつて求めて居る所は藝術家も矢張り追求して居る所である。自然や人生の眞髓を捕えようといふのは彼等に共通な課題である。

それでは藝術家と現實とはどういふ關係にあるかこれが次に起つて來る問題である。自然主義や浪漫主義の樣に現實と個人とを對立さすのは誤で

ある事は既に述べた通りである。思ふに眞の藝術家には世界は普通の意識に現はれる如くに繪卷の樣には見えない。彼等は直ちに自己を世界の一成素（Bestandteil）として感ずる。世界と自己とは同一不二になつてしまふのである。色々の印象が強い刺激となつて幾度も幾度も繰り返されて我々の感官の門を叩く、そうすると此入り亂れ込み合つた斷續的な各要素はある一の點に於て互に接觸し、秩序立てられ、又表現せられる。藝術家は卽ち此一點である。彼は此場合には前の世界から離れ去り、今造り出された新な世界の一成素となつて居るのである。其故にかの世界と個人とを全く分離して考へるのは非常な謬見である。世界は個人に於て絕えず新しく生成するものである。從つて此現實界の眞相も、外部から悟性を强制して無理に眞理として受け納れさす樣な性質のものではない。藝術家其人の內に湧き出づる內面的體驗となつて初めて現はれるものである。

昔の哲學では思惟作用のみが確實なる認識の根源であると考へた。然し其後漸く感性とても夫れが組織立てられて後には思惟作用と等しく確實な認識の根源であると考へられる樣になつた。感性的直觀なしには思惟作用も認識を與へる事が出來ぬといふ考はこの感性的直觀にも既に一の精神作用が含まれてある事を許して居る。かの悟性の抽象作用の非常に進んだ、力とか法則とか云ふやうな高い程度の形式になつたものだけが確實性をもつて居るわけではない。普通思惟作用の材料になるばかりと考へられて居る單純直觀にも既にかういふ風になるべき一の心象（ビルド）が存在して居るのである。此理は全く藝術家の場合にあつても同樣である。現實を其最も簡單な形式や過程に於て捕える極めて初步の經驗も、矢張りそれから導いて現實を表現する精神的成果に到らしめるものである。

藝術的活動のあらゆる發展進歩は皆この一心象（ゲビルド）の藝術的自己表現にまつものである。かく藝術家も亦、抽象から抽象に進んで行くものである、直觀に於て與へられた心象はこの必然的な抽象形式に從つて漸次擴大し又高められて行く。而してそれに應じて混亂、不定、流動の狀態にあつたものが漸時明晰、確實、持續的に改まつて行くのである。

かやうに考へると藝術的活動と云ふものは眞に自由なものである。對立せる世界の壓迫を免れ、又他から任意的に打しつけられた課題の解決に役立てる必要もなくなる。藝術は自己の個有の內面的性質以外に何等の法則にも從ふ必要はない。かくの如き藝術の自由なる活動に從はんか、我々は決して「萬人共通の低い現實界に潛り込んだ」とか、或は又現實の手から免れんがために「小說的な別世界に昇り行く」とか云ふ譏を受けなくともよい樣になるのである。

要するに昔から今日迄に藝術の考察に於て二つの大きな原理が互に覇を爭ふて居た。卽ち「現實模倣の原理」(das Princip der Nachahmung der Wirklichkeit)及び「現實變化の原理」(das Princip der Umwandlung der Wirklichkeit)がそれである。然しこの兩者は孰れも到底保持して行けぬと云ふ事は我々の既に見た通りである。それ故にこゝに「現實創造の原理」(das Princip des Produktion der Wirklichkeit)とふ第三の原理を持つて來て初めて藝術の本質に關する問題が最も都合よく解決される。「創造」と云ふ語も蓋し不當ではあるまい。なぜと云ふに藝術は畢竟先づ人をして現實を得さする手段に外ならぬからである。